新著紹介

社會學原理

高田保馬著

社會學原理一卷總頁數一千三百八十五。其量に於て其質に於て洵に社會學界稀に見る一大著作である。著者研鑽十年汎く先進諸家の學說を渉獵讀破して克く自家一新體系を樹立し、之を述ぶるに四閱年の長き苦心を費したものである。著者の穉書を披くや苟も說いて餘さざらんとし縱橫に諸說を提げ來つて一々檢討の斧を揮ひ、其の採るべきをとり其の破すべきを破し以つて自家の立言を擁立する所洵に洋々として大海の瀋うつ如く吾人の着眼を啓き歸局を敎示し裨益する所甚だ大なるものがある。吾人は先づ著者の研鑽努力と其の學界に對する貢獻とに對し多大の敬意を表し併せて左に本書の內容の大要及之に對する所感の一二を述べて感謝の辭に代へたいと思ふ。

本書篇次の體裁は大體アウグレの「社會學とは何ぞや」、及著者が比較的多くの影響を受けたるギディングスの著書の一「歸納社會學」の結構により、社會學、社會成立論、社會形態論、社會結果論の四篇から成つて居る。第一篇は即ち其總論で著者は第一章「社會學の概念」に於て開口先づ社會學の定義を與へて社會學は社會即ち有情者の結合を對象とする科學であるとし社會學は一切の社會を對象とするが故に動物社會も亦社會學の對象であるが研究の便宜上主として人間社會に限るとし、社會即社會現象と見るの見を駁して社會は廣義に於ける社會現象の一でありそは經濟道德宗敎等の諸現象と齊しく同一なる歷史的社會的實在的の種々なる方面の一であると斷じて居る。次に社會學が科學である以上理想又は價値を前提とする社會哲學及政策論と峻別すべく、社會史及社會進化論が史學事象學の性質を帶ぶるが故を以つて之を法則の學たる社會學の領域より驅逐すべしと論じ、又社會學は社會團結の本質を闡明するにあり社會心理學は結合の結果として吾人の意識內に生じ來る變動を考察するものであるが故に又別個の學であると說き、更に從來社會學の體統觀念を一々批評點檢して社會現象の包括的考察の可能を否定し「かくて舊き社會學觀念は滅びて吾人の新觀念の之に代る可き事老父既に死して長子の相續す可きに異ならず……新しき社會學はたゞ社會現象の一部分即ち有情者の結合を對象とするのみ。舊き社會學は社會科學に對し其研究結果の綜合者たり又は之に對する基礎的知識、根本原理の供給者として上下の關係に立ちしが、新しき社會學は等しく歷史的社會的實在の一面的考察として他の社會科學と對等の地位に立つ。」と喝破して所謂社會科學界の一平民としての社會學觀念を高調して居る。第二章「社會學の問題」に於いては社會學の問題を以つて社會の種々なる種類即ち形態及其の同時的繼起的相互關係を論ずる社會形態の問題と、かゝる社會が如何なる心理的因子により如何なる過程を經て構成せらるゝかを論ずる社會成立の問題と、社會結合の結果は如何なる事象であるか、又社會は如何なる過程によつてかゝる結果を生ずるか、又社會形態がこの結果の上に如何なる影響を與ふるかを研究する社會結果の問題の三であると論じ、次で第三章「社會本質論」に於て社會の本質を論じ從來諸學者が原素

的社會事實等の名稱の下に漠然社會の本質、社會の構成原理、社會現象の特徴の三者を混同せることを難じ、社會の本質を以つて望まれたる共存なりと斷じ、かゝるが故に共存の欲求に反せる「反對」或は「爭鬪」の現象は社會學の對象外であり、望まれたる共存にして心的相互作用なきあり、心的相互作用ありとするも其間猶共存の欲求なきこともあり、且つ相互作用には間斷あれども社會は間斷なく存續するものなるが故に心的相互作用を以つて社會の本質であるとする輓近社會學界の主潮に對し論難頗る努め、其他意志なき所に社會あり、協働なき所亦社會あり得るの故を以つて意志結合說、協働說を破棄し、次に社會の心的因子を說いて社會そのものを說かざるものとして同類意識說、反覆作用說に一擊數擊を加へ、更に社會現象の特徴に着眼する說に論及して相互作用說、模倣說、感應說を難じて著者の所謂共存說なる力說し、從來諸大家の說を一々俎上に擧げ來り理路曲折循々として說き來り說去るところ、淡々たる行論の中猶著者の意氣の靄勃として現れ來るの思ひがある。次に第四章「社會の構成原理」に於いて社會を成立せしむる根本動力として欲望の平行說を提示し、模倣、同情暗示、同類意識、相類似するもの、愛等の諸說の皆誤れることを辯じ、社會前の生物學的原始的慾望の外何物をも有しない極少人を假定し、彼等が接觸より如何にして社會が生するに至つたかを論じて結社はもと胃の腑の事柄であると斷じ、かくてこの根本動力より又如何にして群居の本能、協働、反對、社會的勢力の欲望等が出來、これ等派生的原理と根本原理とが如何に協力し又如何なる過程によつて宏大なる社會組織をなすかの問題卽ち第二篇社會成立論に移る。蓋し著者が所謂社會構成原理としての欲望平行說は著者自らギディングスの同樣反應說と密接なる類緣あることを語つて居るが、又タルドが個人的勢力をして社會的金體を形成せしむる所の方向の一致を以つて暗示模倣の結果であるとせる思想發展上相距る一步である。卽ちタルド說の原因結果を顚倒しこれにワオードの欲望を以つて社會力と見る考、スモール等のインテレスト說を綜合する時は著者と同樣なる見地に立つことが出來ると考へられる。

第二篇は社會結合の紐帶の種類により三段に、同質結合論、異質結合論、社會意識論に分たれ、前二者を自發的積極的と見、後者は外部より強制して既存の結合を維持するに止る消極的の紐帶であり、又同質結合は本來愛着による結合、異質結合は本來利祿による結合で、後者は前者を豫想し前者を俟つて成立するものであると論じ、同質結合を生成せしむる心理的因子として群居の本能、交通の本能、單純協働、反覆作用を數へ、そが欲望の平行より生成する過程を述べ、次に異質結合の根本現象として複雜協働——就中重要なるは職業的協働卽ち分業——を擧げ、複雜協働が力の欲望より生成するものであること、而して力の欲望は彼の同質結合が先づ胃の事柄であつたに對し先づ色の事柄であり、性の爲めに誇示、優勝、支配、爭鬪の欲望を生じ、人口增加し食物を得ることの益困難なるに從ひ食物の探究が團體的となり、團體と團體との接近爭鬪頻繁なるにつれて個人的才能の要求となり、その社會的事情とその卓越者の有する力の欲望被征服社會の附屬等とによつて先づ最初の專業的分岐たる首長、武將、僧侶、閑散階

級、生産的勞役者、奴隷等の分化を生じ、かくて人口益々增加するにつれ力の欲望により分業が漸發達する過程を述べ、更に分業の社會紐帶としての意義を說き、進んで社會意識論に於いて其の意義、拘束力、成立、分化を論じて居る。第三篇社會形態論は著者の以つて社會學の中心的問題となす所で先づ社會結合を抽象的に直接結合間接結合の基礎形態に分ち、前者を以つて結合の爲めの結合、愛着による結合、全人的犧牲的結合とし、後者を以つて利益の爲めの結合、部分的個人中心的結合であるとし、具體的結合としては此二種の結合の重複關係により直接結合、直接間接結合、間接直接結合、間接結合の四結合に分類し、更に之を二大別として前二者を自然社會又は基礎社會とし、後の二者を人爲社會派生社會と名ける。然し社會形態の考察は社會團體に限るべきでなく團體以外の結社として社會圈、社會關係を擧げこれを派生社會に入れる。而して右の中直接結合は原始時代に於ける論理的想定が悠遠なる將來の理想の社會であるとし、社會進化の可逆を說いて著者社會理想の片鱗を見せて居る。次に直接間接社會を血緣團體(家族氏族)、地緣血緣團體(群及び部族)、地緣團體(國家地方團體)に分ち、間接直接社會として中世の職業團體宗教團體を擧げ、間接社會を分つて統制的、經濟的、文化的に大別し、かくて此等の諸形態の成立、性質、機能及び各個相互間の同時的繼起的關係を說明し、同時的にはこれ等諸形態の間に密接なる逆行關係あり、繼起的には社會の發達傾向を說いて基礎社會の擴大縮小の法則、中間社會消失の法則により世界的大國家の出現を豫想し派生社會の社會的錯綜の法則、交易化の法則を論じて社會的原子化、文明國民の商人化を現代社會の狀態と見、更にかくの如き發達傾向の根本原理として欲望の平行を擧げ、そが人口の增加により分業となり、分業によりて文化內容の增加あり、かくて二者は又相互に相規定して社會形態の變動ありと說いて居る。第四篇社會結果論に述ぶる所は社會が如何なる過程により又如何なる姿に個人を變化せしめるかの問題で、其の變化の最大なるものは個性の完成であると見、これと互に作用を有する變化過程として文化の發達と自由の實現を擧げ、先づ文化が力の欲望平行を基本として創造傳播の二原理により如何にして發達するか、又文化衰退の原因如何を論じて人類無限の完成の可能性に及び、次に文化が社會により如何に制約されるかを說いて人口、分業、社會錯綜化との關係を述べ、自由の發達の項に於いては人類の社會發達史を以つて自由の增加の歷史であるといふ通說の不完全を說いて自由束縛の分水嶺は進化中の或階段にありて發達は原始への復歸なりと斷じ、自由は平等を俟つて始めて可能なることを述べ、自由の程度の決定條件として人口の增加又は社會擴大及社會錯綜の二者を擧げ、終りに個性の發達に及んで可逆、不可逆を說き、文化內容享受の自由により何人も全人的には同じからざれども部人的には萬人は萬人と相類似するが故に此意味に於いても發達は原始への復歸なりと見、個性發達の直接原因を等しく人口增加、社會錯綜化によつて說明し、終に文化、自由、個性の發達の相關關係を述べ、最後社會と個人との循環的相制を說いて「事實は永久の循環的流轉なり、社會は個人を追ひ、個人はまた社會を追ひ、遂にかの將來に置かれたる標的、社會的原子化に向ひて進む。」の一句

を以つて全篇を終つて居る。

著者論を行る周密細微、而かも叩いて餘さゞらんとして反覆叮嚀を極む。加ふるに「もと章節項を分たず、大體の腹案により筆の趨く所によつて」成りしものであるから、時に錯綜の個處もあるやうに思はれ、之を理解するに當つて可成りの努力と忍耐とがいる。吾人の不敏を以つてして忽卒の中にこれを略述することの或は却つて著者の眞意を損ふことあるべきを深く謝したい。若し夫れ其の内容の一々の批評の如き到底吾人の今日爲し得る所でない。只最も特色ある第一篇社會學概念、社會の本質に關する著者の見解に對し所感の一二を述べさして頂きたいと思ふ。

吾人は先づ第一に著者が科學的立脚地に立つて他迄もこれを嚴守せんとする態度の明確裁然たるを喜ぶものである。即ち社會學が地域の如何を問はず時の古今を論ぜず普遍的に又不斷に行はるゝ變動の過程によつて法則の組織、普遍的關係概念の體統を構成せんとする限り、社會學は社會哲學、社會理想論、社會政策論、社會史、社會進化論をその研究範圍の中より放逐すべきものである。然しながら全篇を通覽するに猶この立脚地の徹底に多少の遺憾がありはしまいか。著者が社會成立論、特に社會結果論に於て暗默の間に社會理想論を吐露して居ることは必ずしも問ふを要しないとして、所謂地域の如何を問はず時の古今を論ぜず普遍的に又不斷に行はるゝ變動の過程による法則を求めんとならば、時を異にし處を異にして行はるゝ社會形態の分類、關係の研究を以つて社會學の中心問題とするは稍其の當を失して居はしまいか、即ち著者の立場を徹底せしむればあらゆる社會形態それ〳〵に同樣に行はるゝ普遍的法則を求むるが社會學の主要問題となると考へることは出來ぬであらうか。著者は社會進化論を驅逐することの必要を說きながら見方によつては其の社會成立論、社會結果論の少からぬ部分が社會進化論的性質を帶びてゐるといはれないであらうか。余は今假りにかゝる社會學を純正社會學とし、社會進化論をこれより驅逐することに贊同するとしても吾人は社會學即ち純正社會學であるといふ考に對して倏に首肯することが出來ない。即ち純正社會學以外尙社會進化的研究を何等かの形に於いて社會學の一分野としたいといふ希望をもち、又其の可能を信じて研究の歩を進めて見たいと思ふ。著者は別著社會學的研究に於いて社會進化論の性質を論じ、進化を以つて反覆せざること、法則を以つて反覆のことゝなし、社會進化論の不可能を說いて居るが進化が全然刻々に新なるものゝ創造であるならば連續といふことはあり得ないではあるまいか、我々が異と見るは異中既に同を許して居るのであり、其の中一貫の傾向があり得ると見られないであらうか、著者既に本書に於いて社會諸形態間の繼起的關係を說いて一切社會を通ずる發達の傾向あることを斷言してこれを說述し又生物進化の法則の可能を認めて居る以上、同樣に社會進化論の可能を認めることが出來ないであらうか。社會進化的考察を何等の形に於いても社會學に於いて許さないことの寧ろ不可能とまでいつてよいことは著者の社會學が既に其例證を示しゐるのではなからうか。又著者は結合現象を社會現象の一種であると見、從つて結合の科學である社會學の手より衞餘社會科學に對する君臨の王冠を奪ひ去つたのは洵に社會學史上に於けるフランス革命ともい

ふべきであるが、然し著者の所謂歴史的社會的實在とは如何なるものであらうか、吾人は猶從來諸家の說を討れ愼重に考察を重ねたいと思ふ。尙共存說に對して次の如き場合はこれを如何に考ふべきであらうか。卽ち彼の菊池寛氏の「恩讐の彼方へ」にある如く一人あり父の讐なる仇敵を討たんとす、敵手會々旣に大悟して肉身を捨てたりと雖も今多年の宿願たる公益事業を果し終ふる迄命を乞ふ、卽ち諸して其業を畢へて不俱戴天の仇を討つの日の一日も速からんが爲め共に其業に協働する時、其心は宿怨に燃ゆ共存の欲求至も無くして二人は猶社會を成して居るではなからうか。又家族の成員東西に四散して何等相互作用ないとすれば卽ちこれ全然別世界の人であり、此等の人は生理學的に若干の類似を有し、又法律上家族關係を有するといふに止り最早社會學的考察の外にあるものといふべきではあるまいか。若し相互作用の斷絕でなく斷續であるとすればこれ相互作用あるものと見てよいではあるまいか、尙著者は反對、爭鬪、分離は結合に非ず、故にこれを含む相互作用說は採るべからずと說かれるが、然し又著者の說によれば反對も亦欲望の平行に因由し、それ自體一の社會關係と見て居られ、尙此等の現象が社會學的に重大な意義があることを認めて實際著者の社會學的說明に重要なる一部をなして居る以上、これを社會學の對象とする方が「便宜上」に於ても適當なりと見られないであらうか。文化價値と社會結合の觀念との關係、及文化一般の概念に就いても少し教示を受けたいと思はれた。

淺學未熟なる吾人は今粗漫蕪雜の論を以つて著者多年の思索の結果に對し積極的の異見を述べんとするものでは勿論ない。右は只讀過の際思ひ浮んだ疑問の二三を記したに止る。若し夫れ吾人の本書によつて得たる多大の恩惠は誠に感謝の辭を知らない。私はかくの如き眞摯な、包括的にして又獨創的な一新社會學體系が東海の學界に現れ出でたることを誇とし、衷心敬意と慶意を表し苟も社會學を云爲するものゝ是非一度は讀破を要する著作として汎く斯學に興味を有する人々にお薦めしたいと思ふ。願くは著者の益々健かに此上とも學界に裨益を與へられんことを。大正八年二月、東京神田南神保町、岩波書店發行。定價六圓五拾錢。（銅直勇）。

現今歐米教育の進化

文學士　松濤泰巖著

著者は嘗て小學校を除いて殆ど各種の學校に教鞭を取られ、目下は奈良女子高等師範學校に於て專ら教育學を講ぜらるゝ學識經驗兼れ備へた人である。氏が海外留學を終へて昨春歸朝せられたるを聞き、我が教育研究會では歐米教育事情を聞くべく懇請した早速快諾「國語問題並に教育行政問題を中心として」御話し下さつた。其際自分は紛糾せる問題をよくもあれだけ簡潔に話されたものだなと感じた。そしてもつと外の問題に就ても御話を承りたいなと思つた。所が小西先生から「松濤君から本が來たから見よ」と云はれて本を手にした時初づ望みの則せずして達せられた事を嬉び、一讀し終つて歐米の新教育が手際よく紹介された事に感心し我國の教育者を益する事少なからざるも思つたのであつた。勿論あゝした事柄なれば研究室に通つてゐる程の人ならば容易に知り得る事であり、又周知の事だと思つた節もないでもなかつた。け